別紙様式1　　令和5年度学校評価表　　（ 中間・(最終) ）　　学校名　三原市立小泉小学校　　校番（ 14 ）

a 学校教育目標	学びに向かい，心豊かで，健やかな児童の育成 ～「かしこく」「やさしく」「たくましく」～	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】（自校の使命） 自分を愛し，夢を語る児童の育成 【ビジョン】（自校の将来像） 「通ってよかった」「通わせてよかった」と誇りに思われる学校

評価計画						自己評価						改善方策	学校関係者評価			
	c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	10月 h 達成値	2月 h 達成値	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	l 評価 イ	l 評価 ロ	l 評価 ハ	m コメント
確かな学力	確かな学力の育成〈かしこく〉	授業力の向上	○対話を生み出す課題づくり ○「児童の思考を促す」，「対話を生かす」等の視点による授業評価票を活用した授業改善 ○定期アンケート評価による成果と課題の把握，分析，改善策検討	○授業評価票「思考を促す」「対話を活かす」評価項目の平均ポイント3以上の職員の割合 ○児童アンケートの肯定的評価の割合	8月80% 1月85%	100% 91%	100% 95.6%	115.0%	A	・授業評価票の結果は肯定的評価が100%であった。各授業者が児童から課題を引き出し、児童の思考・対話を促すことを意識しながら授業を行った結果だと考えられる。各授業者が、前時からのつながりを生かした課題設定、対話場面でのやりとりの促し方など、今年度の研究授業の中で見えたよい点や課題点を踏まえながら授業を構成していた。 ・児童アンケートの肯定的評価の割合は95．6%だった。児童アンケートの算数科に関する3項目とも、肯定的評価が95%以上となっており、児童自身が算数科の学習の流れが身についたと実感していると考えられる。 ・1学期から継続して実施している週に一度のソーシャルスキルトレーニングも、授業の中でペアやグループの相手とコミュニケーションをとる能力の向上につながったのではないかと考えられる。	・今後も、各授業者が児童の学びたいという思いをもとに課題を引き出し、対話を通して児童同士の学び合いが行われるよう授業をファシリテートしていく必要がある。研究授業等を通して、各授業者が既習事項の活用を意識したり、児童の対話を促すための工夫を取り入れたりすることができるようになったことで、授業が改善されてきており、児童の肯定感も向上しているため、年度末まで継続して取り組む。 ・自分の考えを伝える力や学んだことを言語化する力を高めるためにR80（80字以内でまとめる）の取組を全職員で充実させる。	○			・児童の自己肯定感を育てる取組をこれからも継続してほしい。 ・以前よりも児童の学ぶ姿が変化していると感じる。児童が書く文字を見ても変化を感じる。丁寧な指導が行われていることが伺われる。 ・これからも学ぶ楽しさを実感できる授業に全教職員で取り組んでほしい。
		基礎学力の定着	○学力向上に向けた計画的，効果的な取組の実施及び個への支援手立てと授業改善策の検討 ○学力調査分析事業の活用 ○家庭学習をやり切らせる指導とICT活用による家庭学習の実施	○算数科・国語科単元末テスト通過率	85%以上	算数科 81.9% 国語科 87.7%	算数科 85.7% 国語科 85.3%	100.0%	A	・各学年の算数科・国語科の単元末テストの「知識・技能」「思考・判断・表現」を平均した結果、通過率は85.5%であった。算数科・国語科ともに85%以上の数値であったことから、朝の帯タイムに実施したアシストシートや、全国学力調査の課題箇所に対する復習、クロームブックを用いた反復学習などを行った結果だと考えられる。	・目標値に達してはいるが，国語科の「知識・技能」，算数科の「思考・判断・表現」については，83%台であった。各学級の課題に応じたアシストシートを実施したり、本校で作成・実施しているNRT類似テストの課題箇所の復習を行ったりすることで、課題を克服することができるようにしていく。5年生は朝の帯タイム等を活用し、過去の全国学力・学習状況調査の結果から課題の大きかった領域を中心に対策を行うことで、学力の向上を図る。	○			・授業改善とあわせて、各学年でつけるべき基礎学力を確実に定着させてほしい。 ・考えたことや学んだことを自分で言葉で表現する力は身に着けておくべき大切な力だと考える。その力の育成を充実させてほしい。
豊かな心	豊かな心の育成（優しく）	ふるさとを愛する心情の育成	○生活科，総合的な学習の時間を中心とした地域人材・地域教材を活用した授業を推進し，地域への愛着・感謝の心を育てる。	○学校アンケート「小泉の地域のすきですか」肯定的評価4の児童の割合	85%	84.0%	85.0%	98.0%	B	・アンケート「小泉の地域がすきですか」に対して、肯定的に評価している児童は85%であった。中間評価と比較してわずかではあるが上回った。 ・幼稚園、1・2年生が民生委員の方々や保護者の協力のもと、「さつまいもの収穫」「やきいも大会」を行った。また、総合的な学習の中で5年生は「里芋の収穫体験」で地域の方を講師として学習活動を行っている。6年生においては、白滝園への訪問を通して自分達ができることを考え行動する学習活動を行っている。地域の方々や保護者の方々の力が支えとなった学習活動を継続して行ったことが成果につながっていると考える。	・今後も、地域人材・地域教材を活用した授業を積み重ねていく。 ・生活科及び総合的な学習と各教科等との関連を再度見直し、改善点を検討する等カリキュラムマネジメントに取り組む。 ・小泉の地域の一人としてできることを自分事として考えさせたり、表現する場（行動する場）を設定したりして地域への愛着・感謝の心を育て、自己有用感の向上につなげていく。	○			・小泉だからこそ学べることや体験できることを取り入れていくこと、地域の人含めて学校とつながっていくことが大切だと思う。地域としても協力していきたい。 ・思いを言葉にすることができる子ども達がたくさんいると感じる。教職員に子ども達のよさを今後も引き出していってほしい。 ・学年ごとにできる地域貢献をさらに検討していくとさらに充実するのではないかと考える。 ・子ども達の心を育もうと教職員間で協力して取り組んでいる。 ・小泉の地域を好きだと感じている子ども達が多いことをうれしく思う。地域で出会うと、子ども達は元気な声で挨拶をしてくれている。地域と学校とのつながりが増えることをこれからも期待する。
		児童の自己有用感の醸成 チャレンジする心の育成	○「小泉小5つの宝」（①ほかほか言葉②時間を守る③トイレのスリッパ揃え④気持ちのよいあいさつ⑤静かな廊下歩行）の児童による取組推進及び改善実施 ○ハイパーQUや定期アンケートの評価による成果と課題把握，分析，改善策検討	○「小泉小5つの宝」のうち重点強化週間振り返りにおける児童の肯定的評価 ○ハイパーQU （6月中旬，1月下旬）分析による学級生活満足群の割合で評価	85% 60%	97.5% 72.5%	96.5% 76.7%	116% 128%	A A	○重点項目に「気持ちの良いあいさつ」、「ほかほか言葉を使おう」を設定し、強化週間後に行った児童アンケートにおける肯定的評価は、「気持ちの良いあいさつができた」が99%、「ほかほか言葉を使うことができた」が94%であった。今回の結果は、児童会が中心となって「あいさつスタンプラリー」や「ほかほかポスト」といった児童が意欲的に活動に取り組めるような工夫を行ったことが主な要因と考えられる。 ○第2回ハイパーQUにおいて、学校生活満足群の割合は76.7%であった。各学年の詳細を見ると、どの学年もおおむね数値の向上が見られるなど、第１回実施後に行ってきた学級経営の改善や、個別対応の成果と考えられる。しかし、依然として低い数値に留まっている学年もあるため、来年度以降も継続的な指導・支援が必要である。	○引き続き、月ごとの生活目標を主にして、全校で5つの宝を達成できるように取り組んでいく。また、5つの宝の重要性だけではなく、児童会が中心となって、「児童が学校を良くしていく」という意識を全校児童が持つことができるような活動を行っていく。 ○個別指導については、満足群に属していない児童の実態を来年度の担任にも確実に引き継ぐ。また、学級担任のみではなく、学校にいる教員全員が該当児童を支えていく姿勢を持ち、指導を行っていく。そのために、情報共有を場を多く設定し、綿密な連携を行っていく。学級経営については、各学級内で係活動・当番活動などを中心に、児童が評価される場を設定し、児童の自己肯定感が高まるような取組を年間を通して行っていく。	○			
健やかな体	健やかな体の育成〈たくましく〉	運動意欲の向上	○アンケートの結果分析による課題分析をし，取組内容の決定と実施 ○体育科における運動遊びの実施 ○休憩時間等を活用した学級遊びの取組実施	○運動やスポーツが好きな児童の割合	7月 80% 12月 90%	91.0%	92.0%	#####	A	「運動やスポーツをすることが好きですか」の肯定的評価は92%で、否定的な回答をする児童が2名減った。 がんばり朝会の中で様々な運動遊びを行ったり、体育科の授業等で、運動領域ごとに分けた「小泉小運動遊び例」を活用していく中で、児童が様々な運動経験を得たり、、楽しく体を動かしたりすることを継続して経験できたことが影響しているのではないかと考えられる。	○体育科の授業で、主運動につながるような運動遊びを積極的に取り入れる取組を、学校全体で進めていく。 ○がんばり朝会での運動遊びの他に、児童が楽しみながら運動・スポーツに親しむことができるような機会を検討し、実施をしていく。 ○休み時間の外遊びの充実を図る。	○			・学校全体で工夫した取組が行われている。 ・体力の向上にこれからも重点的に取り組んでほしい。 ・運動する機会や場づくりを増やし、子ども達に体を動かす喜びを感じさせてほしい。
		体をつくる	○給食を食べ切る分量の自己決定と完食しようと努力する児童の育成 ○食に対する感謝の気持ちを醸成する指導，取組実施	○学校アンケート「給食は自分で決めた分量を食べていますか」の肯定的評価	90%以上	95.0%	95.0%	#####	A	○「給食は自分で決めた量を食べていますか」の肯定的評価は、95%で1学期と同様だった。（昨年度末より4%向上）11月に保健体育委員会が「完食の実」の取組を企画した。また、取組期間に食材の栄養や効能等について自分たちで調べたことを、クイズ等を織り交ぜスライドを作成し、給食中にmeetで放送した。栄養教諭へのインタビューも放送の中で行い、給食を作る人の思いや大変さについて知ることが出来た。その結果、「苦手なものにチャレンジした」児童は94.4%、「感謝の気持ちが高まった」児童は100%だった。	・今後も、スライド等視覚に訴える資料を提示したり、給食に係る人へのインタビューを行ったりすることで、児童の食への興味関心や、完食への意識を高め、感謝の気持ちが向上するよう工夫していく。 ・保健体育委員会を中心に取組を企画していくことにより，自分のこととして考え、より取組の効果が高まっていると考えられるため、今後も児童とともに課題解決に向け取り組んでいく。	○			・栄養教諭の活用や体験活動も含めた食育の取組は効果的である。育てている人々の思いやいのちをいただく意味等大切なことを子ども達は学んでいると考える。継続してほしい。 ・食品ロスの問題とも関わらせ考えさせるのも一つではないかと考える。
信頼される学校	信頼される学校づくり	発信する	○学校便りの定期的な発行とPTAを活用した地域への配付 ○学年便りの発行	○保護者アンケートにおける「学校は保護者の願いに応えた教育を行っていると思われますか」の肯定的評価	90%以上	98.0%	97.0%	#####	A	・学校便りは毎月発行し、すぐーるで保護者に配信している。保護者を通して地域への回覧も行っているが、2か月まとめて回覧となった月もあった。 ・「学校は保護者の願いに応えた教育を行っていると思いますか」のアンケートに対して肯定的評価は97%であった。「あまり」と回答された保護者に対して、丁寧に聴き取り対応することで、理解を得ることができた。	・今後も定期的な発行を継続し、児童の様子を保護者に発信していく。 ・学年便り等でも児童の具体的な姿を発信したり、学級懇談会でも学校の取組や児童のがんばり等を伝えたりして、保護者との連携を大切にしながら日々の教育活動を進めていく。 ・日々、保護者との連携を細やかにとること、児童一人一人が安心して学ぶことができる体制を整えることに、より一層取り組んでいく。	○			・学校の教育活動の「見える化」は、地域や保護者にとって学校への関心・協力につながり、とても大切である。継続してほしい。 ・保護者に寄り添う取組は安心して学ぶ場にもつながると思う。
		組織の活性化と効果的な教育活動推進	○学校経営会議を核としたベクトルを揃えた取組実施 ○各部会（研究推進部，生徒指導部，保健体育部）における進捗管理とPDCAサイクルの活用による改善策の検討実施 ○担任者会における教職員の交流による取組の円滑な遂行 ○学校経営会議，三部会等を活用，教員の業務改善案を取り入れた業務改善の推進	○「1年のうち1月における時間外在校等時間が45時間を超える月数6月以内」の職員の割合	100%	85.0%	84.0%	85.0%	B	・毎月、時間外在校等時間が45時間を超える職員が2名いる。時間外在校時間数については、少しずつではあるが減少傾向にある。教職員の体調や業務内容等を見ながら改善を図っていかなければならない。 ・他の業務や研修等と重なったりして、担任者会の設定や時間が十分とることができていない。	・主任層や見通しをもちながら各部会で相談しながら業務にあたったり、声を掛け合ったりする雰囲気を今後も継承していく。 ・準衛生委員会等、教職員の状況を互いに把握したり改善できることはないか考えたりして、組織力の向上にも取り組んでいく。 ・年間行事等を見ながら担任者会や研修の日時を見直しを行っていく。	○			・教職員の負担が少しでも改善されることをこれからも期待する。 ・教職員一人一人が、業務改善をしていこうとする意識を高めていくことが大切であると考える。 ・教職員同士がしっかり子ども達と向き合い、協働していき、組織力の向上を図ってほしい。

【j：自己評価　評価】
A：100≦（目標達成）　B：80≦（ほぼ達成）＜100
C：60≦（もう少し）＜80　D：（できていない）＜60

【l：学校関係者評価　評価】
イ：自己評価は適正である。 ロ：自己評価は適正でない。
ハ：分からない。